慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Faustischer Mensch : Eine Methode zur Faustforschung
Sub Title	
Author	越塚, 信行(Koshizuka, Nobuyuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.25, (1968. 3) ,p.272- 288
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	英語英文学・独語独文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00250001-0272

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Faustischer Mensch

* Eine Methode zur Faustforschung *

越 塚 信 行

"Da kommen sie (die Deutschen) und fragen: welche Idee ich in meinem Faust verkörpern gesucht? — Als ob ich das selber wüßte und aussprechen könnte! — Vom Himmel durch die Welt zur Hölle, das wäre zur Noth etwas; aber das ist keine Idee, sondern Gang der Handlung. Und ferner, daß der Teufel die Wette verliert, und daß ein aus schweren Verirrungen immerfort zum Besseren aufstrebender Mensch zu erlösen sey, das ist zwar ein wirksamer, Manches erklärender guter Gedanke, aber es ist keine Idee, die dem Ganzen und jeder einzelnen Scene im besonderen zu Grunde liege. Es hätte auch in der That ein schönes Ding werden müssen, wenn ich ein so reiches, buntes, und so höchst mannigfaltiges Leben, wie ich es im Faust zur Anschauung gebracht, auf die magere Schnur einer einzigen durchgehenden Idee hätte reihen wollen!"

Eckermann: Gespräche mit Goethe. 6. May 1827.

I. Das Alibi der Kritik

文学作品に限らず，すべての芸術作品は，作家の手を離れると同時にそれ自体の生命を持つ，ということは確かに一面の真理ではあるが，作品に生命を与えたのは飽迄作家であり，読者乃至は鑑賞者でないことも明瞭で

ある。何故なら，読者乃至は鑑賞者は飽迄受身の側であり，作品を genießen することは出来ても，それを schaffen し，bearbeiten することは許されないからである。読者乃至は鑑賞者にはただ作品を批評・鑑賞し，nacherleben することのみが許される（批評家，研究者が一種特別の地位にあるかの如き錯覚は，古今東西を問わず，稍もすれば容認され勝ちであるが，彼等は決して作家の上に立つ特権階級ではなく，寧ろ彼等こそ先ず第一に最も良き読者，鑑賞者でなければならず，その為には上述の基本線は必らず守られねばならぬことはいうまでもない）。この点に関しては，本稿の冒頭に掲げた Goethe の言葉は，作家の側からの発言として充分注目さるべきであろう。

ところで，われわれがある作品の生命に就いて語る場合，この《生命》の概念は極めて広汎な意味を持つものであり，いわゆる古典的作品の持つ生命の新鮮な息吹きが，現代においてもなおみずみずしい命脈を保っていることに漸く気付いた批評家達が《〜の再発見》という種類の標題で，しばしば秀れた作品を論じていることは，吾人のよく経験するところであり，いま音楽を例にとれば，Bach などはその現代性が最近極めて盛大に論ぜられ，従来とは逆に，Bach の現代性を論ずることなしに所謂古典音楽のみならず現代音楽をも論ずることは不可能であるかの印象を受けるのは，つい最近まで Bach 音楽の宗教性——つまりバロック芸術に共通な——のみが論ぜられて来たことを思えばまことに今昔の感に堪えぬものがある。

作家の血と汗の結晶である作品は，われわれの文化の推進者の貴重な生活の歴史であり，一個の生命の発展過程を示すものとして重要な意味を持つと同時に，人類文化の進歩発展をも示す貴重な資料として，充分慎重に取扱われねばならぬのは当然である。

従って，何らかの固定観念に基いて為される——というよりは，寧ろ，それに取憑かれた，といった方がより適切と思われる——作品解釈の方法は，作者の意図に沿わぬばかりか，著しく作品の生命を損い，同時にその価値判断をも誤らせるものである。

そのような誤謬と偏見が正され，作品が正当に批判解釈され，先ず何よ

りも，その時空を超越した清新な生命力が受けとられることは，決して作品自体の生命の成長ではないが，広い意味で，寛容な立場——それも最大限の——からすれば成長と呼んでも必らずしも不当ではない。そこに本来孤独なすべての芸術作品に負わされた十字架の重みをわれわれは認めざるを得ないのである。

しかも，上述の《再発見》という過程——つまり，作家並びに作品になんらの関わりも責任もない一定期間の正当な批評・解釈の不在証明の確認——なしに，発表と同時に正しくその真価を認められる作家及び作品はほとんど皆無といっても恐らく過言ではあるまい。

この様な意味での作品の生命の成長——すなわち，何物かと置き換えられ，すり換えられた成長——とは別に，更に本質的な意味での成長が作品にはある。

すなわち《Faust》について述べるならば，Urfaust (1772～5年)；Fragment(1790年)；Faust 第一部 (1808年)；Faust 第二部(1832年) と何れも相当長期の中断の期間を置いて制作，発表された一連の作品には，例え同じ語句が用いられていても，それらは各々異なる次元において解釈されねばならぬ場合があり，一つの語句もやがては次の次元への発展の可能性を含むものであることが尠くない。

ここにその一，二の例を挙げてみよう。

《Urfaust》において《Gefühl ist alles!》と絶叫した時の Faust は，まだ Sturm u. Drang の渦中にあり，徒らに Titanismus を謳歌するのみで，激しい振幅を持つ感情の波間を当て途もなく漂う舟夫にも似た自然児的存在であった。そこでは如何に力んでみても Gefühl と Tat とは結びつき得よう筈もなかったのである。

一方，《Fragment》を経て完成された《Faust》に到って初めて，Gefühl は Urerlebnis にまで遡り，Tat と緊密に結びつくことになり，Faust は schaffender Mensth として真に Titan あるいは Taten-Genius としての本領を発揮し得ることになる。

同じ《Gefühl》ではあっても，両者の意味内容はこのように異なる。

更に同じ場面の《Gott》を比較すれば,

Mein Kind wer darf das sagen,
Ich glaub einen Gott!
Urfaust. Marthens Garten

Mein Liebchen, wer darf sagen;
Ich glaub' an Gott?
Faust. Ibid.

《Urfaust》と《Faust》とでは《ein Gott》と《Gott》との相違がある。すなわち前者の神は主観的に把握された神, 後者のそれは普遍的に把握された神である。

生まの感情をそのまま文字に移した Sturm u. Drang 時代の作品である《Urfaust》にあっては, 人それぞれに胸に懐く絶対的なものを《Gott》と呼ぶことはむしろ相応しかったに違いない。然しながら, 碩学 Faust が, 古い教会信仰を絶対的なものと信じ込んでいる十代の乙女に向って, このようなむき出しの感情を吐露するのは相応くしくないばかりか, Drama の Handlung から考えても不自然であることも, これまた当然であり, 《ein Gott》は矢張普遍的に認められた唯一絶対の《Gott》に変化したと見なければならず, かくしていよいよ Faust の悲劇の様相は深まるのである。

Faust は Gretchen を説得する立場にある。Gretchen には Faust の学識の深さもその苦悩も勿論理解できない。が恋する者の直観で二人の間に越えられ相にない距りのあることは, 彼女にも感じられる。牧師様も確かそんな風に仰言ってらしったけれど, 《どこか一寸違っているように》彼女には思われる。Faust は幼な児をあやす様にそのような彼女を説得せねばならない。説得の為には感情の昂揚も抑えなければならない。しかも肝腎な点になると, Faust の生活信条と Gretchen の教会信仰とは全く相容れないのである。これこそ Gretchen Tragödie の重要な Motiv であり,

その raison d'être の一つである。

何れにせよ，今迄に見て来た一連の Faust 作品の連関を考えれば，これらの作品の生命は成長するものであることはいうまでもない。従って，これらの作品は，それぞれに独立した生命を保ちつつ，作者の成長をそのまま，少年から青年へ，更には成人へと成長してゆく各段階を示すものとして把握さるべきであり，同時代史的意義上からもそれぞれの時代によって段階的に検討は慎重に繰返されなければならない。それはただ単に作品の語句の解釈や出典の詮索のみに終始する書斎での研究に頼る限り不可能なことである。豊かな感受性と，作者と同様の純粋なものへの憧憬に全てを捧げ得る者のみに可能な，極めて困難な作業であり，同時に多くの努力と忍耐とを要求される大事業でもある。ここでは作品を追体験 (nacherleben) せねばならず，その為には通俗的で平板な経験のみならず，これに相通ずる体験も必要になってくる。従って，われわれは Faust 同様，論理の暗い書齋を離れ，明るい陽光の輝く大空の下，緑なす大地にしっかと足を踏みしめ，流動する生の様相との対比において，《見る手》《触れる目》によってこれを把握せねばならない。

《この偉大にして実に汲めども尽きせぬ人間性のドラマの永遠の価値——J. Bertram》をこそ，われわれは凡ゆる手段を用いて模索し，帰納法と演繹法との相会する微妙な一点，すなわち，人間が人間たることを開始する Start, Urerlebnis に出発し，作品と作者と読者とを結びつける人間性の秘密をこそ解明せねばならない。

作品の象徴性は勿論，作者の心情の純粋性も，更には，作者の胸奥深く秘められた琴線に触れ得る批評も，畢竟すべてはこの一点に始まり，ここに再び立ち戻るものであり，すべての成果はここに結実するというべきであろう。

II. Gehalt und Gestalt

扱て，ある思想乃至は理念を表現する場合，人間はやはり人間の持つ表現手段，人間の所有して来た素材に頼る以外に方法のないことは当然であ

る。この意味で Goethe は教会儀式の伝統的な形式を籍りて《Faust》全篇の壮大な Finale の劇的効果を昂めることに成功した。

勿論，彼が世間一般のキリスト教信者同様の信仰を持つはずもなく，キリスト教を彼の時代における最も完全な宗教として認めはしたものの，それが永遠に完全なものであるとは一言も述べなかったのみならず，彼は未来の宗教を予言することもしなかった——かつてヴァルミーの戦野にフランス革命による新しい時代の夜明けを予言し，あるいは，分裂した祖国ドイツが漸て統一され，旅券なしに国内を自由に旅行し得る日の到来することを予言し，更に，スエズ，パナマ両運河の開通を予言したようには。

然しながら，一方に於てはキリスト教の存在意義を認めながら，ただ単にその儀式を利用したに過ぎなかったところにこそ，《偉大なる異教徒》たる Goethe の心秘かに描いていた理想的な宗教の在り方が象徴されていたものと考えられる。それこそ人間に人間の限界を破ることを可能ならしめ，人間と神との繋りを楽園追放以前の時代へと引戻すものである。

かくて，いずれかといえば素朴且つ単純明快，ある点では melodramatisch ともいえる Faust 第一部と，相ついで展開する事件の複雑さで絢爛豪華目を奪うばかりの一大人間絵巻とも称すべき第二部との断層は，形式的にも実質的にもほとんど埋められ，第2部終幕の壮麗な Spektakel は第二部の主要部を形成する《Prolog im Himmel》と緊密に結びつけられることになり，この Prolog は Goethe の計画通り，茲に初めて名実ともに Faust 全曲のための序曲たり得たのである。

Sturm und Drang 時代の Titanismus および感情謳歌時代の象徴ともいうべき Goethe の宗教観と，当時の Katholizismus との対比を見事に描き出した，Faust と Gretchen とのいわゆる信仰問答 (Kathechismus) ——実は恋の口説なのであるが——の部分に見られる，神，宗教，愛についての会話は，既成社会の市民に共通な Gretchen の伝統的な教会信仰に対して，敢て名づけるならば Faust の生活信仰ともいうべきその反俗的生活信条を，詩的直観的に活き活きと伝えると同時に，それは《Trüber Tag》への伏線としても極めて効果的な役割を果している。

それは Prolog im Himmel に始まり，Gretchen Tragödie を超え，古典の世界をも超越して更に現実に深く足を踏み入れ，Magie の力をも超脱し，自然の前に一個の人間として敢然と立ち，その全存在を挙げて創造への意欲に生きることのみに生の意義を見出す生活信仰者の不断の Tat への意志の象徴でもある。

《牧師の手紙》に現われた新しい宗教観，Werther 時代に見られる純粋性への憧憬の結晶ともいうべき反俗的な信仰の概念，更に Weimar 移住後の，複雑な人間関係と社会環境との中での鎖された心の憂い (Sorge) から彼を解放し再生せしめたイタリアでの生活，そこで経験されたより広く全く自由な生活と，加えて，それとは全く対照的に，この明るい南国の太陽の下でさえ，かつての彼とは異った形で，鎖された世界に住むひとびとの生活の中に重く澱んでいる Katholizismus の濁った滓——このような明暗二色の世界の内部から新しい彼の生活信仰は愈々鞏固なものへと育って行った。

このことは，Urfaust と Fragment 及び Faust 第一部における信仰問答の部分を比較するのみで既に充分に理解されるところである。

元来《Urfaust》における表現・語法は総じて自由奔放，一度び興到って筆を執り，勢いの赴く儘に一気呵成に書きなぐり，Drama としての筋や統一などは念頭になかった，というのが事実であろう。加えてその独特な表現で知られる，Goetheの母 Aja 夫人の書簡ほどではないにせよ，多く Frankfurt am Main の方言を取入れている為もあって，殊に Lesedrama としては田舎臭い点もあり，その上聊か誇張され過ぎた嫌いもある。

《Fragment》においてはそれらがほとんど修正され，全文中十数ケ所が書き改められた上，更に《Trüber Tag》に相当する部分は省かれている。この部分は結局 Faust 全曲中唯一つの散文の箇処として残されているもので，Goethe はこれを韻文化してから改めて発表する計画であったことは，Schiller 宛の書簡 (5. Mai 1798) によっても明らかである。

すなわち，Goethe はその表現の生ま生ましさが全体の調和を乱すので，せめて韻文化することによってこれを柔げようとしたのであるが，その新

鮮で直接的な青年時代の印象が，韻文化するには余りにも強烈で，改作は不可能であると認めると同時に，一方又，散文の儘に往時の面影を留めることにより，彼は《Faust》の他の部分で行なったと同様に，《Werther》の中で主人公が為し得なかったことを，彼のWerther時代の貴重な記念として遺したものの様である。この点に関して暫く考えてみよう。

III. Das Alibi des Dichters

《Werther》を論ずる場合，必らず問題になるのは，三人の登場人物，Werther, Lotte, Albert のそれぞれに対する二人ずつの実在の Model であるが，Lotte のModelの一人で，Goethe 自ら兄妹のような愛情で結ばれていたと称した Maximiliane Brentano およびその夫で Albert の Model の一人と目される，作者の故郷 Frankfurt am Main の富裕な商人である嫉妬深い俗物の Brentano, 更に Werther の Model の一人で，その自殺が《Werther》創作の直接の誘因になったといわれ，Goethe とは旧知の間柄であった Jerusalem と，併せて三人に就いては，本稿に関する限り，本質的には論議の対象とはなり得ないので全てこれらに言及することをせず，本来の Model である，Goethe, Lotte すなわち Charlotte Buff（のちに Kestner）およびその婚約者で，作者 Goethe がこの小説の舞台となった Wetzlar から故郷へ帰った後に夫となった J. C. Kestner の三人のみを取上げて論を進めることにする。

Werther あるいは Goethe の愛した Lotte は，もちろん彼らに好意を寄せていたには相違ないが，何れも結局は彼女の愛を獲得し得ず，一時的な激しい恋愛よりは，寧ろ穏やかな永続する愛情と，古くからの習慣と平和で堅実な家庭生活の方に比重を置く彼女もまた，その社会的に有能な婚約者（夫）を捨ててまで，性格も生活も不安定な芸術家肌の彼らに全てを任せ得る女性ではなかったのみならず，加えて，社会的に堅実な道を歩みつつある頼母しい男性を生涯の伴侶に，そして同時に溢れるばかりの天賦の才を持つ詩人を友人（しかも自己の讃美者である）として持つ，などというのは，Werther＝Goethe の側から見ても，Albert＝Kestner の側から

見ても，聊か彼女の身勝手に過ぎる願いであったろうことは，想像に難くない。破綻の一つの原因はここにも存在したと見られる。

賢明であることは恐ろしい。結果的に見て，Lotte のみならず，Goethe も Kestner も，三者三様に賢明であった。そして，そのことが悲劇を形成する要因であったということも出来よう。寧ろ倖せだったのは小説の主人公 Werther のみではなかったろうかとも思われるのである。

一方《Faust》における Gretchen は，Faust に全てを与え，母親殺し，嬰児殺し（この罪に対する刑罰が如何に苛酷，惨虐を極めるものであったかは当時の記録を一読するのみで事足りる）の罪を犯しながらも，尚ひたすらに Faust の身を念って，自らの身を亡ぼしてまでも彼の救済を願い，Faust もまた，このような可憐な乙女心に応えて，全身全霊を以って，愚かしいまでに彼女を愛し切ったのである。

それぞれに異る両者の愛と信仰とは遂に彼岸において Gretchen のみならず Faust をも救済し，二人がそこで永遠の祝福を受ける一つの鍵となったのである。これが結局，所謂《諦念の人》Goethe の考えついた Faust 救済の形式であった。

ところが，この諦念（Resignation）なる語が Goethe に関して余りにも乱用されるばかりに，彼が多情多感な Werther をして死に至らしめた事実を以って直ちに，ひとびとは Sturm und Drang の克服であり，彼の諦念の表示であると結論し勝ちであるが，このような死が諦念でなく飽迄現実からの逃避であることは今も昔も渝りはない。傷つき易く壊れ易い，情感に溢れた純粋な魂にとって，死は汚辱と絶望の日々から彼を救ってくれるこよなく美しい憩いの場であった。

そこでは時間が停止し，一度び純粋な魂のみの経験し得る至高の充足感——ひたすらに愛し，愛されているという——を味わった青年は，例えそれが美しき惑いに過ぎなかったにせよ，いわば永遠の浄福を胸に懐き続けられるものと考えた。

それ故にこそ，すべての青年は Werther の如く愛し，すべての女性は Lotte の如く愛されることを望んだに相違ない。

しかしながら，激しい情熱に身を焦しつつも，鋭敏な感覚と豊かな知性とを兼ね備えていた詩人には，《明日のこと》があまりにも明白に予測された。それゆえ，恐るべき明日——破滅の明日——を迎えることなしに，彼はその愛と死とを不滅のものとせねばならなかった。

自殺という加害者なき自己抹殺の手段——それが Goethe の見出した逃げ道であった。それは後年彼が見事に歌い上げた《Stirb und werde!》というような積極的な意味を死に対して附与するものではなかったが，兎も角も見事に成功した芸術的な完全犯罪であった。

その見事な完璧さは，多くの青年男女にこの芸術的完全犯罪の検事たるよりは寧ろ弁護人たることを望ましめ，かくて主人公の愛した黄色いズボンと青い燕尾服が巷に溢れ，遂には多くの青年男女が相次いで Werther の後を追い，著者自身さえも知人の少女が《Werther〉の小冊子を胸に抱いて投身自殺したのを目撃するという不思議な偶然を経験することになったのである。

詩人は Werther の死によって Lotte との絆が断ち切られ，同時に後年自ら der pathologische Zustand と呼んだ危険な情熱と Weltschmerz とが完全に消滅したものと思った。

ところが，それは飽迄《完全犯罪》たるに留まった。例えそれが罰や贖いを要求される筋合いのものでなくとも，完全犯罪と呼ばれ得る以上，それはどこまでも犯罪であり，永遠にそれを犯した者の肩に重くのし掛るものであることに渝りはない。Goethe が二度と再びこの作品を読もうとしなかったのは，彼の賢明さがそれを要求した為であろうが，彼の最も尊敬していた Dämon の象徴ともいうべき人物のみは，えを見抜いていたものの様である。単に秀れた軍人であるばかりでなく，卓越した政治家，法律家でもあったこの英雄は，Goethe と会見した際に《Werther》の矛盾について著者に訊ねたと伝えられているにも拘わらず，それが極めて鋭い批評であったことを認めながら，著者自身はその内容について具体的には一言も述べていないのは，世にいわれる単なる政治的配慮からのみであろうか。

Goethe に随伴した Kanzler Müller は，《Werther の傷つけられた名誉

欲の動機と情熱的恋愛のそれとが混淆しているのが不自然である》と Napoleon の言葉を伝えているが，寧ろ Bonstetten の伝える Napoleon の《Werther の結末を好まない。(—Je n'aime pas la fin de votre roman—Werther.)》という言葉の方にこそ比重が置かるべきで，自国の古典類を暗んじて《Werther》をも7回読んだという彼は，検察官の鋭さで Goethe を追求し，この巧みな完全犯罪に対する著者の不在証明を求めたとしか考えられない。

信頼し得る人々の証言を総合すれば，心ならずも被告席に立たされたかつての弁護士と，この検察官との虚々実々の広酬は，残念ながら時間切れとなり，最終弁論に入らぬまま二人は袂を分たねばならなかった，というのが事実と思われる。

ところが，これは飽迄筆者の臆測に過ぎないが，Goethe の計画した完全犯罪は，Lotte すなわち Charlotte Buff (Kestner) およびその許婚者で後に夫となった Albert，すなわち J. C. Kestner の抹殺計画にまで及んでいたのではないか，ということである。

この臆測の根拠となるものは，もちろん第一に当時の Goethe の現実からの逃避であり，第二は，Lotte の許を去って以来，急激に彼女および Kestner 宛の書簡がその数を減じて行き，その内容も用語や表現の誇張に反して，本質的には刻々冷却して行ったという事実であり，《Werther》発刊後は当然のことながらこれは殊に著しい傾向である。従って第三には，後年 Lotte が未亡人となって Goethe の許を訪れた際，極めて冷淡にあしらわれたという事実がこれを証明するものである。

第一に関しては既に述べたところでも充分明らかであり，今更説明の要はあるまい。

第二に関しては，1772年9月11日に"Adieu tausendmal adieu!"と無量の想いをこめて Lotte に書き遺して Wetzlar を去って以来，この年の末迄に彼女あるいはKestner 宛の書簡は11通，翌年は16通，翌々年は9通，75年には僅か1通を数えるのみで，以後は同じ Charlotte でも《von Stein》がその後に書き加えられることになる。(文献 6. 9. による。)*

《Werther》に対する Kestner の抗議も，肩すかしの感のある Goethe の回答で完全に無視された形であった。

第三については，Kestner 夫妻とは全く交際が断たれ，偶々 Lotte の末の妹 Amalie が Weimar の Kammerrat Ridel (Goethe は Rider と記している）の許に嫁いでいた為，同家を訪れた Kestner 末亡人 Lotte が，1816 年 9 月25日から10月21日までの間に，Goethe 邸および劇場で前後 4 回 Goethe と会っていることが Goethe 自身の日記に記され，最初の訪問について，Lotte に同行した娘の Klara が長兄 August 宛の書簡に，Goethe の宮廷風の礼儀と心遣いの底に《聊かも感動らしいものは見当らなかった—Rührung kam nicht in sein Herz》ことを訴え， Lotte 自身も《わたしは新しく一人の老人と知り合いになりました——ich habe eine neue Bekanntschaft von einem alten Manne gemacht》と報じて，Goethe の与えた印象の《予期した通り》冷やかであった様子を記している。

何れにせよ《Werther》に纏わるひとびとの存在は Goethe にとっては既に好ましいものではあり得なかったことは明白である。

Werther 時代の Lotte 像は，要するに彼にとっては他の女性との恋愛においてもしばしば見られるように，彼自ら作り上げた Idol に過ぎず，若しこの観点からのみ極言することが許されるならば，この作品は感傷的な Weltschmerz に酔っていた青年詩人の甘美な夢の終末——Merck と共に過した Darmstadt の die Gemeinschaft der Heiligen と称するサークルの Freundinnen との儚ない夢物語への終止符に過ぎなかったと云うことも出来よう。

とはいえ，常に Entweder-Oder の道を歩んでいた Goethe にとって，この作品が《ペリカンのように自分の心臓の血で育てた子供》であることに渝りはなかった。

死ぬ気が起ればいつでもその刃尖を胸に突き立てられるように，鋭い短剣を枕の下に秘めていたという当時の彼の苦しみが，如何に深刻なものであったかは，既に《Werther》そのものが十二分に語っている上に，この病的な状態の恐しさがなお後年の彼の追憶の中にも鮮やかに生き続けていた

ことは周知の事実であり，その意味では，この作品の悲劇的な結末を招来した一つの原因は，Goethe 自身の Lotte に対する愛の純粋性を保たんが為の，いわば愛の自己放棄ともいい得るものである。

IV. Der Weg zur Entsagung

以上のような考察を経て初めて《Werther》と所謂 Goethe の諦念とが漸くにして結びつけられる。それは勿論，古典期の Goethe が到達し得たものとは質的には遥かに隔るものではあるが，ある意味ではこれも諦念と呼ぶことが出来よう。唯，それが一方においては Goethe の逃げ道となってしまったのは，著者自身の若さにも拠るものであろう。その若さの齎らした作品自体の欠陥を知悉するがゆえに，後の版において《この主人公の如く弱く生きる勿れ》と書き加えざるを得なかったが，それは必ずしもこの作品の社会的影響を慮った結果とばかりは受取り難いのである。というのも，一面においては反ってこの作品に彼は絶対の自信を持っていたことが，Eckermann との対話や，この作品を《全く不道徳な，呪うべき書物 — ein ganz unmoralisches, verdammungswürdiges Buch》と非難した英国の僧侶 Lord Bristol への，機智と自信に溢れたメフィスト的答弁にも明らかに認められるからである。

種々の理由はあるにせよ，結局のところ，自らを知る者の賢明さが，詩人をしてその身を破滅から救い，反って，この世にも美しく儚ないロマンを生ましめたともいえよう。

然るに《Faust》においては，詩人は己が情熱と叡知の全てを賭けて主人公に只管目的を追求せしめる。そこには全く妥協はない。

Gretchen を愛し，傷つけ，加えて前述の度重なる罪過を純真な乙女に犯させ，自らもまた，故意ではないにせよその兄の生命を断ってまでも，まっしぐらに驀進して，振向くことを知らない。人間の経験し，見聞し得る限りのものを求めて彼は貪慾なまでに生を味了し，自由奔放に生き抜く。目的達成の為には悪魔とも契約して憚らない。そこには，非情とまではいえぬにしても，生への意慾を貫こうとする徹底した dämonisch な生き方

が見られる。

完成された《Faust》と《Werther》との間にはこれだけの相違がある。

諦念（Resignation）は放棄ではない。心身ともに生活に倦み，何ら為すところなく己が分に安んじて以って足れりとする小市民的満足感の中に安住することは勿論 Goethe の求めるところではなかったばかりか，仮定的な個我の領域に留まって，既に事の初めから己が努力の結果を案ずる如き退嬰的な生活態度は，彼の最も軽蔑するところであった。そのことは，凡ゆる分野における彼の超人的な努力と業績とを知る人全ての肯定するところであろう。しかもこのような dämonisch な活動にもかかわらず，彼自身は dämonisch な人間ではない，と断言している事実は，とりも直さず，彼が如何に意識的に努力精進を重ねていたかを実証するものといえよう。従って Faust 第二部五幕の

Noch hab' ich mich ins Freie nicht gekämpft.
Könnt' ich Magie vor meinem Pfad entfernen,
Die Zaubersprüche ganz und gar verlernen,
Stünd' ich, Natur, vor dir ein Mann allein,
Da wär's der Mühe wert, ein Mensch zu sein.

Faust. Z. 11403 ～

という Faust の台詞こそこれを裏書きするものであり，同時に又，作者自身の望むところを如実に示すものでもあった。ここにわれわれは，作者 Goethe と Faust とがもつれ合い，からまり合って，何れが何れとも区別のつき兼ねる程に，Realität と Dichtung の世界との不思議に混淆された姿を見出すことになる。

それは正に，Werther と Goethe とが屢々一体になってしまう姿に相通ずるものがある。この意味でも《Werther》がそうであったように《Faust》も Goethe にとって《ペリカンのように自己の心臓の血で育てた》愛児であった。ただ，前者は夭折し，後者は，その養育の為に Goethe がその生

涯を賭けた愛児だったのである。

Weimar 候の招待に端を発した，仮初の滞在に終るべきはずの人口10万の小候国での生活は，いつか国政に参与することによって Goethe の身をこの地に縛りつけ，遂に83才の長寿を全うしてこの世を去るまで，多大の犠牲を強いられ続ける結果となったのであるが，財政軍事産業各方面の改革のみならず，彼の愛した劇場の経営改善に至るまで，その意図したところは，周囲の反対，嫉妬，羨望などによって意の儘に進捗せず，時には文字通り生命を賭けて企図した国政改革も，結局は徒労に終ったのであった。しかも彼を非愛国者として糾弾しようとする人々の数も尠くはなかったのである。

《Weimar の Jupiter》は決して倖せではなかった。彼の周囲では一切が彼の意図に逆らって動いているように思われることも屢々であった。《ドイツの文人たることはドイツの殉教者となることである》というのが諸国の王候から多くの敬意と名誉とを贈られ，世界各国から引きも切らぬ巡礼者を迎えねばならなかった81才の大詩人の卒直な感想であった。

詩人宰相の生きる道は結局，かつて歴史家 H. Luden に語ったように，国境のない学問芸術の世界に沈潜すること以外になかった。

かくて，《Werther》において果し得なかったものを《Faust》において成就せしめたと同様の意味において，Goethe はその実生活において果し得なかったもの（—理想国の建設もその主たるものの一つである—）を Faust に実行せしめたのである。この意味において，《Faust》は Goethe 畢生の《賭》と称することが出来よう。

Faust は，四大の秘密を探り，その深奥を統べるものの姿を見究める，という当初の目的を，《erst groß und mächtig,／Nun aber geht es weise, geht bedächtig》と自ら述懐するように，正に Titan として遂行し《Dem Tüchtigen ist diese Welt nicht stumm》と悟る。

けれども，それが全てではない。《Sorge》の呪いによって盲いた彼は，反って行為（Tat）への意志を益々堅くする。

Das ist der Weisheit letzter Schluß:
Nur der verdient sich Freiheit wie das Leben,
Der täglich sie erobern muß.

Faust Z. 11574 ～

Wort → Sinn → Kraft → Tat という logos の意味の把握の変遷は正に Tat による裏づけによって完成され，Sturm u. Drang 期から追求し続けて来た作者の Tat の解明も同時に完了することになる。そしてそれこそは Faust を救済し，作者 Goethe をも救済する一つの鍵たり得たのである。

Wer immer strebend sich bemüht,
Den können wir erlösen.

Faust Z. 11936 ～

茲に高らかに天使は救いの歌を投げ掛け，Faust の不死の霊魂を天上高く運び去るのである。

Literaur

1. Emil Staiger; Goethe. 3 Bde. Atlantis Verlag. 1957—9.
2. Hanna Fischer-Lamberg: Der junge Goethe. Bd. I-III. Walter de Gruyter Co. 1963-6.
3. Flodoard Frhr. v. Biedermann: 5 Bde. 1909-1911.
4. J. P. Eckermann: Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens. Eberhard Brockhaus. 1949.
5. E. Grumach u. R. Grumach: Goethe Begegnungen u. Gespräche. Bd. I, II, Walter de Gruyter Co. 1965, 1966.
6. Philipp Stein: Goethe=Briefe. 8 Bde. Berlin 1913-191
7. Goethes Werke u. Schriften, Tagebücher Bd. 1-3. Cotta.
8. Briefe an Goethe. Hamburger Ausgabe Bd. I. 1965.
9. Goethes Briefe. Hamburger Ausgabe I-VI.
10. Hans Schwerte: Faust u. das Faustische. E. Klett Verlag. 1962.
11. Wolfgang Streicher: Die dramatische Einheit von Goethes Faust. Max

Niemeyer Verlag. 1966.
12. Käte Tischendorf: Goethes Mutter. Wilhelm Langewiesche=Brandt. 1914.
13. Thomas Mann: Lotte in Weimar. (T. Mann Gesammelte Werke. Bd. II.) Fischer Verlag. 1960.
14. Goethes Werke. Hamburger Ausgabe. 14 Bde.
15. G. Witkowski: Goethes Faust. Hesse & Becker Verlag. 1929.
16. GOETHE: FAUST. 1. URFAUST, FAUST. EIN FRAGMENT Akademie-Verlag Berlin. 1954

＊同封された書簡は併せて一通と数える。